東洋文庫 104

今昔物語集 4

本朝部

永積安明
池上洵一 訳

平凡社

ながづみやすあき
永積安明　明治41年山口県生。東京大学文学部国文学科卒(昭7)。神戸大学教授。専攻　国文学。主著　『中世文学の成立』(岩波書店),『中世文学の展望』(東京大学出版会),「現代語訳『宇治拾遺物語　お伽草子』」(筑摩書房)など。現住所　芦屋市打出翠ヶ丘町26

いけがみじゅんいち
池上洵一　昭和12年岡山県生。神戸大学文学部文学科卒(昭35)。熊本大学助教授。専攻　説話文学。主論文「欠文の語るもの」(『文学』昭和39年1月号),「今昔物語の説話受容態度」(『法文論叢』21号)。現住所　熊本市大江2丁目6-35-4

今昔物語集4　本朝部〔全6巻〕　東洋文庫104

昭和42年12月10日　初版発行

定価450円

訳者　永積安明
　　池上洵一

東京都千代田区四番町4番地
発行者　下中邦彦

発行所　東京都千代田区四番町4番地　振替・東京29639　株式会社　平凡社

落丁・乱丁本はお取替えいたします　印刷　東洋印刷株式会社　製本　石津製本株式会社

© 株式会社　平凡社　1967

凡　例

一　本書の口語訳は、原則として意訳を避け、できるだけ原文に忠実であることを心がけた。ただ直訳のままでは、現代文として成り立たぬ場合、あるいは文意をつくさなかったり、冗長にすぎたりする場合などには、たとえば句の順序をかえたり、主語・客語等を補い、または省くなどして意訳したところがある。俗語的表現は、恣意に陥ることを恐れ、なるべくこれを避けた。

一　本文中□により囲まれた空白部は、それに相当する部分が原本に欠脱していることを示す。〔　　〕内の語句は、原本に欠脱している部分を、原本と同文的な類話（原則として『梅沢本古本説話集』・『宇治拾遺物語』等より以前に成立したと思われるものに限定し、それ以後の説話はとらなかった）、あるいは確実な史料のある場合に限り、それらによって補ったものである。これらの典拠は、それぞれ巻末に注記した。

一　訳文中の人名・地名は原則として原文の表記のままとしたが、（　　）内に適宜補充して読者の便をはかったところがある。

一　平易な用語に訳しにくい難解な語句は、注記により、それぞれ簡略な説明を加えた。

一　和歌・詩文・経文は、原則として、本文中では原文のまま読み方を示すにとどめ、その大意を注として巻末に示した。

一　各説話の標目は、なるべく、原文の読みくだしに近く、口語訳することにつとめた。

一　口語訳の原本には、岩波版日本古典文学大系本『今昔物語集』の本文を使用した。

一　本書の挿絵は、井沢長秀の享保版『考訂今昔物語』所載のものによった。（井沢本は、はじめて『今昔物語集』を大衆的に紹介したものであるが、本朝部のみの抄本である。）

一　本書の口語訳にあたっては、前記の日本古典文学大系本のほかに、山岸徳平氏による校註日本文学大系本『今昔物語集』の頭注、長野嘗一氏の日本古典全書本『今昔物語』等を参考にした。中でも山田孝雄・同　忠雄・同　英雄・同　俊雄四氏校注の日本古典文学大系本『今昔物語集』は、口語訳の原本としたばかりでなく、読み方・注解その他にわたって、多大の恩恵をこうむった。特に記して深甚の謝意を表したい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

目次

巻第二十一　諸本欠

巻第二十二　本朝

大織冠、初めて藤原の姓を賜わる語第一　三
淡海公を継ぐ四家の語第二　五
房前の大臣、北家を始める語第三　九
内麿の大臣、悪馬に乗る語第四　一〇
閑院の冬嗣の右大臣および子息の語第五　一一
堀河の太政大臣基経の語第六　一三
高藤の内大臣の語第七　一四
時平の大臣、国経の大納言の妻を取る語第八　一六
二四

巻第二十三　本朝

第一語より第十二語まで欠
平維衡、同致頼、合戦して咎を蒙る語第十三　三七
左衛門尉平致経、明尊僧正を送る語第十四　三八
陸奥前司橘則光、人を切り殺す語第十五　四三
駿河前司橘季通、構えて逃げる語第十六　四七
尾張国の女、美濃狐を伏す語第十七　五一
尾張国の女、細畳を取り返す語第十八　五三
比叡山の実因僧都の強力の語第十九　五五
広沢の寛朝僧正の強力の語第二十　五九
大学の衆、相撲人の成村を試みる語第二十一　六三
相撲人海恒世、蛇に会い、力を試みる語第二十二　六六
相撲人私市宗平、鰐を投げる語第二十三　六八
相撲人大井光遠の妹の強力の語第二十四　七一
相撲人成村、恒世と勝負の語第二十五　七四
兼時と敦行との競馬の勝負の語第二十六　七七

巻第二十四　本朝

北辺の大臣と長谷雄中納言との語第一　八五
高陽親王、人形を造り田の中に立てる語第二　八六
小野宮の大饗に九条大臣、打衣を得る語第三　八七
爪の上で勁刷を返した男と針を返した女との語第四　八八
百済川成と飛騨の工と挑みあう語第五　八九
碁擲ちの寛蓮、碁擲ちの女に値う語第六　九三
典薬寮に行き、病を治した女の語第七　九九
女、医師の家に行き、瘡を治して逃げる語第八　一〇一
蛇に嫁いだ女を医師治す語第九　一〇七
震旦の僧長秀、この朝に来て医師に仕われる語第十　一〇八
忠明、竜に出会った者を治す語第十一　一一〇
雅忠、人の家を見て瘡の病のあることを指す語第十二　一一三
滋岳川人、地の神に追われる語第十三　一一三
天文博士の弓削是雄、夢を占う語第十四　一一七
賀茂忠行、道を子の保憲に伝える語第十五　一二〇

安倍清明、忠行に随い道を習う語第十六　二二三
保憲と清明と共に覆い物を占う語第十七　二二七
陰陽の術を以て人を殺す語第十八　二三〇
播摩国の陰陽師智徳法師の語第十九
悪霊と成った人妻の害を除いた陰陽師の語第二十　二三三
僧の登照、朱雀門の倒壊を相する語第二十一　二三五
俊平入道の弟、算の術を習う語第二十二　二三八
源博雅朝臣、逢坂の盲の許に通う語第二十三　二四三
玄象の琵琶、鬼の為に取られる語第二十四　二四六
三善清行宰相と紀長谷雄と口論の語第二十五　二四九
村上天皇、菅原文時と詩を作り給う語第二十六　二五一
大江朝綱の家の尼、詩の読みを直す語第二十七　二五三
天神、御製の詩の読みを人の夢に示し給う語第二十八　二五五
藤原資業の作詩を義忠非難する語第二十九　二五六
藤原為時、詩を作って越前守に任ぜられる語第三十　二五八
延喜の御屏風に伊勢の御息所、和歌を詠む語第三十一　二五九
敦忠中納言、南殿の桜を和歌に詠む語第三十二　二六五
公任大納言、屏風和歌を詠む語第三十三　二六七

公任の大納言、白川の家において和歌を詠む語第三十四　一七〇
在原業平の中将、東の方に行き和歌を詠む語第三十五　一七二
業平、右近の馬場で見た女に和歌を詠む語第三十六　一七四
藤原実方朝臣、陸奥国で和歌を詠む語第三十七　一七六
藤原道信朝臣、父におくれて和歌を詠む語第三十八　一七七
藤原義孝朝臣、死後和歌を詠む語第三十九　一八一
円融院の御葬送の夜、朝光卿和歌を詠む語第四十　一八三
一条院崩御の後、上東門院和歌を詠む語第四十一　一八三
朱雀院の女御薨去の後、女房和歌を詠む語第四十二　一八四
土佐守紀貫之、子を思い和歌を詠む語第四十三　一八五
安倍仲麿、唐にいて和歌を詠む語第四十四　一八六
小野篁、隠岐国に流された時和歌を詠む語第四十五　一八七
河原院に歌詠みたちが来て和歌を詠む語第四十六　一八八
伊勢の御息所、幼い時に和歌を詠む語第四十七　一八九
三河守大江定基、送り返して和歌を詠む語第四十八　一九〇
七月十五日に盆を奉った女、和歌を詠む語第四十九　一九〇
筑前守源道済の侍の妻、最後に和歌を詠んで死ぬ語第五十　一九一
大江匡衡の妻赤染、和歌を詠む語第五十一　一九四

大江匡衡、和琴を和歌に詠む語第五十二　一九五
祭主大中臣輔親、郭公を和歌に詠む語第五十三　一九六
陽成院の御子元良親王、和歌を詠む語第五十四　二〇〇
大隅国の郡司、和歌を詠む語第五十五　二〇二
播摩国の郡司の家の女、和歌を詠む語第五十六　二〇六
藤原惟規、和歌を詠んで免される語第五十七　二〇八

巻第二十五　本朝・世俗

平将門、謀反を発して誅される語第一　二三三
藤原純友、海賊の事により誅される語第二　二三九
源充と平良文と合戦の語第三　二四一
平維茂の郎等、殺される語第四　二四五
平維茂、藤原諸任を討つ語第五　二五二
春宮大進源頼光朝臣、狐を射る語第六　二六三
藤原保昌朝臣、盗人袴垂に値う語第七　二六七
源頼親朝臣、清原〔致信〕を討たせる語第八　二六九
源頼信朝臣、平忠恒を責める語第九　二七〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

頼信の言により平貞道、人の頭を切る語第十　二七四
藤原親孝の子、盗人の為に質に捕えられ、頼信の言により免れる語第十一　二七七
源頼信朝臣の男頼義、馬盗人を射殺す語第十二　二八一
源頼義朝臣、安倍貞任等を討つ語第十三　二八五
源義家朝臣、清原武衡等を討つ語第十四　二九六

今昔物語集 4

本朝部

永積安明
池上洵一
訳

巻第二十一

〔諸本欠〕

巻第二十二　本朝

大織冠、初めて藤原の姓を賜わる語第一

今は昔、皇極天皇と申しあげる女帝の御代、皇子の天智天皇は、まだ皇太子でいらっしゃった。その頃、蘇我蝦夷（注一）という一人の大臣がいたが、これは馬子（注二）という大臣の子であった。蝦夷は永年朝廷に仕えていたが、老年に至り身体も弱ってきたので、参内することもできず、いつも子供の入鹿を代わりに参内させては朝廷の政務をとりしきっていたのである。

このため、入鹿は権力をほしいままにし、勝手気ままにふるまっていたが、ある時、皇太子でいらっしゃった天智天皇が蹴鞠をなさっているところへ、入鹿も来て仲間に入った。またその時、大織冠（注三）（藤原鎌足）はまだ公卿などにもならぬ身分の低い時で、大中臣〔鎌足〕（注四）と名乗っておられたが、やはり一緒に鞠を蹴っておいでになった。そのうち皇太子が鞠を蹴られたひょうしに、御沓が御足を離れて飛び上がってしまった。入鹿はおごりたかぶった気持で、皇太子のことなどなんとも思わず、嘲り笑って、その御沓をむこうへ蹴とばしてしまった。皇太子は、このことをひどい仕うちだとお思いになって、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton